研究主題　誰ひとり取り残さない　学びの多様化に応える学校
副　題　～　すべての小学校で実践可能な登校支援の取組　～

長崎市立稲佐小学校
校長　岡田　政宏

Ⅰ はじめに（不登校対策の成果）

はじめに、この研究の取組の成果について、以下の表（図 1）をご覧いただきたい。文部科学省が不登校と定義する「病気や経済的な理由などといった特別な事情がなく、年間の欠席日数が 30 日以上となった状態」の児童は、令和５年度の末時点で本校に１３名存在した。その中で特に欠席日数が多い女子児童が５年生（５年度）に集中しており、A児 160 日、B児 100 日、C児 61 日、D児 149 日という欠席状態であった。A児は学習に苦手意識を持っており、B児とC児は心理的な不安を抱えている。特にC児は５年生の２学期終盤から急に不登校傾向に陥っている。D児は支援学級に在籍しており、心理的な不安に加え、基本的な生活習慣にも課題を抱えている。

本年度に入り、まず小学校内に教室に入れない児童を支援するための別室（以下「ＳＳＲ」と呼ぶ。スペシャルサポートルームの略）を設置し、先に示した４名が利用できるようにした。４～７月の１学期間を経過した不登校傾向に関連した欠席は、A児４日、B児 18 日、C児 21 日、D児 19 日であった。B児は、家族で話し合い週に１日程度は自主休校の日を設定することとし、計画的に月に４～５日は欠席するが、学校としても了承している。C児は深夜までゲームをするなどメディア依存が気になるが、不安なことが多い中、相談を聞き合うオンライン上の友達の存在もきちんと報告していることから、生活習慣に気を付けながら様子を見ている。D児は、担任が母親と毎朝メールでやり取りし、自宅玄関まで迎えに行き、一緒に元気に登校できている。現在ＳＳＲ利用の４名以外はすべて教室に入ることができており、E児、F児童は、不登校傾向に関連した欠席は共になく、G児は３日にとどまるなど、各学級での地道な支援も見逃せない。

5年度（昨年度）			6年度1学期（4/9～7/19）					
			本年度の学年	別室利用	不登校傾向休	病欠	事故欠	改善傾向
5年	女児A	160	6年	○	4	0	4	↗
5年	女児B	100	6年	○	18	6	14	↗
5年	女児C	61	6年	○	21	19	2	↗
5年	女児D	149	6年	○	19	0	19	↗
4年	男児E	115	5年		0	1	5	↗
4年	男児F	40	5年		0	1	0	↗
4年	男児G	35	5年		3	3	0	↗
2年	男児H	45	3年		17	14	3	→

図１　不登校児童の欠席状況比較（令和５年度 → 令和６年度）

Ⅱ　研究の内容

１　ＳＳＲの設置構想

本校では、令和６年度の学校経営の柱に「誰もが安心して学べる学びの多様化に応える学校」を位置付けた。学校のペースやルールが合わず、集団に同調できない子どもたちが増えている。国も不登校という状況を問題行動ととらえず、学校復帰だけではなく、社会的な自立をゴールに見据えて支援するよう示している。また、特別な教育課程を編成して、対象の子どもたちを受け入れ学びの保証を各地で行ってきた全国各地の「不登校特例校」は、一律「学びの多様化学校」と呼び名を変更した。これらの流れを受け、本校ではあえて「不登校対策」とは呼ばずに「学びの多様化対応」とよび、図２のようなステップを示した。

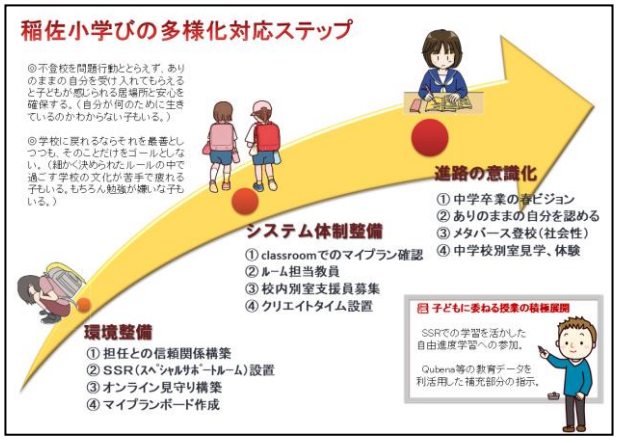

図２　「稲佐小学びの多様化対応ステップ」

まずは、新担任との信頼関係は何にもましてこれらの対応のベースとなる。４名の児童の３名の担任には、従来の対応にこだわらず、本人が安心してコミュニケーションできるやり方を試行するよう指示した。ある児童に対しては個人メッセージのやり取りを、ある児

童に対しては養護教諭がパイプ役となり、ある児童に対しては定期的にＳＣ（スクールカウンセラー）の面談を親子で受けられるように調整した。

写真１　「ＳＳＲ」内で学びを進める児童

そうした人間関係の土台の上にＳＳＲを６年生教室と同じ４階フロアの資料室を間仕切って設置した。しかし、この部屋には空調がなかったため、６月になると蒸し暑くなり、扇風機やスポットクーラーで凌いだ。７月になると気温もさらに上がり、熱中症も心配されたことから１フロア下がり、３階にある少人数指導教室に移動した。突っ張り棒に市販カーテンを付けて簡易的にパーティションを設置したが、これがなかなかに使い勝手が良い。自由にパーティションのレイアウトができるのだ。児童が「４階の方が教室に行けるときに抵抗なく行きやすいし、友達も声をかけに来てくれるからいい。」と訴えているので、涼しい１０月になったらまた移動することにしている。その際、不要になるこの突っ張りカーテンのパーティションは、興奮すると自分を抑えきれなくなる児童がクールダウンする際に有効に使えそうである。

２　オンラインによる見守りとマイプランボード

中学校と比較しての小学校の弱点は、ほぼ全員が学級担任か専科を担当しているため、ＳＳＲに常駐することができない点である。また、長崎市の場合、中学校は心の相談員が定期的に訪問し、ＳＣの派遣日数も多い。つまり、この方々が一時的にＳＳＲを見守ることができるのである。だからといって管理職や養護教諭等が常駐すると通常の学校運営に大きな支障が生じる。そこで、利用する児童に同意を得たうえで、新型コロナウイルス感染症対策として一般化したオンライン会議システムをモニタリングシステムとして、「ＳＳＲ」「保健室」「６年１組」「６年２組」そして「校長室」を常時カメラでつなぐこととした。その際に利用したのがＩＣＴ機器やテレビモニタの再利用だ。児童が不注意で落下させ、通常利用ができなくなった学習者用パソコン（長崎市はChromebookを採用）をＳＳＲと校長室の映像の送受信装置として利用した。特に、校長室には、廃棄処理されようとしていた古い大型テレビをモニターとして壁面に取り付け、学習者用パソコンで受信した映像を大きく映し出すようにしている。さらに、同モニターには、保護者連絡ツールで欠席や遅刻の連絡がリアルタイムに届く「tetoru（テトル）」の画面を映し出しており、本日は何時ごろ登校するのか、または欠席するのかなどの情報もわかるようにした。ＳＳＲにいる子どもたちに伝えたいことがある場合には、内線電話のように音声で伝え、子どもたちから伝えたいことがある場合には、チャット機能や音声でやり取りできるようにしている。

写真２　ＳＳＲとオンライン中継する校長室モニター

さらに、児童に自己選択・自己決定したことを継続してやり抜く経験をさせるために、ホワイトボードで「マイプランボード」を作成し活用させた。今日は何時に来られたのか、給食はどこで食べて何時まで学校で頑張るつもりなのか、学ぶ場所はすべて「ＳＳＲ」なのか、気に入った教科は「教室」で授業に参加するのか、オンラインで授業に参加するのかなどを該当するワードが書かれたマグネットを張りながら考える。後に（６月以降）、自分の考えを他者（担任等）に表明し、記録に残す意味で、学習者用パソコンで撮影し、Google クラスルームのクラウド内に作成した「ＳＳＲ

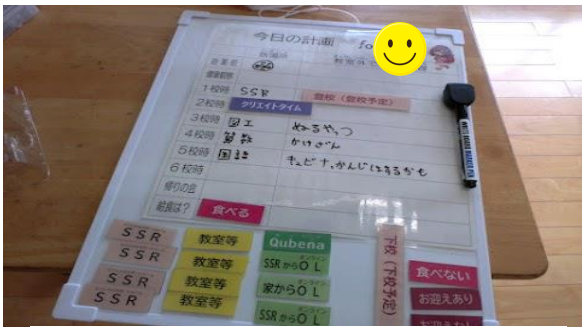

写真３　毎朝マイプランボードで自己選択・自己決定

のクラスルーム」に投稿する活動にも移行した。投稿を見て、担任や校長はアドバイスや感想などの短いコメントを返すようにしている。しかし、６年生といえども自分の学びに何が足りないのか何を優先して学べばいいのか、客観的に捉えなおして学びを調整する力はまだまだ十分ではない。そこで、可能な限り朝から担任が入り、アドバイスをするようにしている。ただし、登校時間が不規則であり、担任が教室で授業中のこともあり、必ずしも毎日適切なアドバイスができているわけではなかった。

写真４　クラウドに投稿されたマイプランボード

３　校内別室支援員の発掘

運動会も終わり、「ＳＳＲ」の運営が軌道に乗り始めた５月末、「稲佐小学びの多様化対応ステップ」は、次の「システム体制整備」のステージに進んだ。

まず、４名の児童のうちの１名の支援学級担任にＳＳＲのルーム担当となってもらい、時間に余裕がある場合は入室の上、声かけやアドバイスできるようにした。さらに、本年度から長崎市が謝金を予算化した校内別室支援員の活用を検討した。本制度は、校内別室での児童の学びの見守りや声掛け、さらに話し相手やレクリエーションといったコミュニケーション育成をサポートする地域のボランティアを学校が発掘し、支援実績に対して謝金を支払うというものである。つまり、人材がないと予算があっても利活用できないのである。そこでまず、地域住民の相談に応じ必要な援助を行うとともに、地域の子どもたちの見守りや子育ての相談にも応じている民生委員児童委員の代表の方に相談した。その中で、域内で委嘱された民生委員児童委員の方々はその他の役職も掛け持ちでされている方が多く多忙を極めており、後継者育成も課題となっていることを伝えられ、「他の活動に支障が出ないこと」「個人の生活に大いなる負担とならないこと」に留意して依頼するようお願いされた。このことを踏まえ、まずお願いしたのが主任児童委員のお一人であった。具体的に何をしたらよいかわからないとおっしゃりながらも、可能な時だけ参加していただけることになった。同時にもう一名の主任児童委員にもお声掛けいただき、そこからさらに民生委員児童委員が加わり、合計３名の校内別室支援員が誕生した。不定期だが、各人調整いただき、おおむね週１ペース、つまり５日間のうち３日は支援員がいることとなった。教員ではないので授業を進めることはできないが、マイプランボードでの計画の援助や学習の見守りを行っていただいた。また、次項で論ずるクリエイトタイムとしてのカードゲームで共に楽しんだり、児童の不安定な心の聞き役となったり、と信頼関係を深めており、児童も支援員が来校する日は特に楽しみにしている。

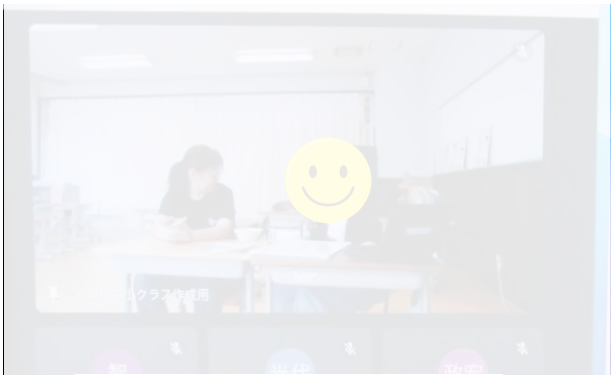

写真５　児童と談笑する校内別室支援員

４　クリエイトタイム

長崎市教育委員会が長崎市民会館で運営する「適応指導教室『ひかり』」、令和５年度から名称を「学びの支援センター『ひかり』」と改め、学校にいけない、教室に入れない小中学生が常時２０名前後利用している。ここでは、通級してきた子どもたち同士が、カードゲームなどを通してコミュニケーションを楽しみ、人との距離感を確かめ、心の元気を貯めていく「クリエイトタイム」という時間が設定されている。家庭に閉じこもりがちな子どもたちは、家族との交流以外、社会とのつながりが途絶えがちになる。学習も大事だか、まずは、人とのつながり、心のエネルギーを満たすことが、社会的な自立の第一歩になると考えてのことである。この「ひかり」での活動を参考に、「ＳＳＲ」も「校内学びの支援センター」として、この「クリエイトタイム」を導入した。グッズはいたって簡単なトランプやＵＮＯ（ウノ）である。１日１時間以内というのを基本ルールとしている。（なかなか、学習する気分にならないときは、ついだらだらと長くなってしまう時もあるが、あえて静観している。）子どもたち同士、

子どもと支援員、複数の子どもと支援員などその組み合わせはその時の気分と構成メンバー次第である。当初、他の子どもとのコミュニケーションを好まないC児は、クリエイトタイムに参加せず、他の児童と離れた机で黙々と学習を進めていたが、ＳＳＲという空間での仲間意識や支援員の働きかけもあり、短時間であるが「クリエイトタイム」に参加するようになった。

写真６　クリエイトタイムに笑顔で交流する児童

「学びの支援センター『ひかり』」のスタッフにクリエイトタイムで子どもたちに人気なツールは何か尋ねたところ、「ボード系では、ブロックス、オセロ、マンカラ・カラハ。カード系では、なんじゃもんじゃ、人狼ゲーム、ワードスナイパー、ミツカルタ」とのこと。さらに、「話すことが苦手な子は、話さずできるボード系を好み、語彙力やコミュニケーション力がある子は、カード系を好む傾向がある。」と助言いただいた。多くの子どもたちを長年支援してきた実績があるスタッフの助言なので、今後の本校運営に生かしていきたい。

Ⅲ 成果と課題

まずは、ＳＳＲという当該児童の校内の居場所を確保できたことで、教室には入れないけれども、自分にはＳＳＲがあるし、話を聞いてくれる担当の先生や支援員がいるという安心感を持てたことが大きな成果につながっていると思われる。

ＳＳＲを利用している６年女児４名について、学習意欲に課題を残している児童もいるが、自分が選択した教科に関しては、４名とも教室に入り、クラスメートと一緒に授業に参加することができるようになってきた。これまで、集団が苦手だったB児も気分がいい日は、教室内でみんなと給食を共にすることもできた。

一方で、以下のような課題もしっかりと見えてきた。

●登校時間が定まらず、難しいが、可能であれば毎朝誰か教職員が付き、一日の学びの計画立てについて助言できる体制が欲しい。

●学習に前向きになれないA児がだらだらと過ごしてしまう時があり、B児がつられてしまう。(家庭ではゴロゴロしていたのが、学校まで毎日足が向き、時間としては長くないが、集中して学習に取り組むときもあるので、それでも前進だとは思っているが…)

●時間を巻き戻すことはできないので、なんとか小学校卒業までの間に、中学校卒業時の「進路（社会的な自立)」のイメージをもてるようにしたい。

●特定の教科でもいいので、継続的に授業参加できるようにしたい。

Ⅳ　おわりに

１学期末に実施した、教育活動に関する教師の自己評価において、「ＳＳＲの設立が不登校児童を救っています。」や「子どもたちの居場所ができて大変助かりました。」といったＳＳＲに対する肯定的な意見が並んだ。昨年度５年生の担任だった教師は「こんなに、成果が上がる取組なのだと分かった。昨年度もこのような対応ができていたら、安心して登校できていたかもしれない。」と感想を漏らす。

最後に、５年生の２学期終盤から不登校傾向にあったC児が「ＳＳＲができたこと」「ＳＳＲで過ごした日々」などの感想を綴っているので紹介する。

「ＳＳＲで過ごしていて感じるのは、やはり安心できること。そして負担が減るという点です。教室では不安感がありますが、ＳＳＲでは人数が少ないということもあり、少し安心することができました。先生方の配慮やＳＳＲに来てくださる方(校内別室支援員等)のおかげで、負担が少し解消しました。友達としゃべれたことや先生がＳＳＲまで来て勉強を教えてくださったことは、ＳＳＲがあったからできたことです。２学期の目標は、もっと教室に入ること。早く具合悪さを治すことです。１学期はなかなか教室に入れず、成績にあまり反映できなかったので、もっと成績を上げられるよう努力したいです。（C児)」

２学期には、ＳＳＲ利用の４名で進学予定の中学校を訪問し、別室での様子やＳＣ（スクールカウンセラー）との面会。中学校の先生による学校紹介等を予定している。